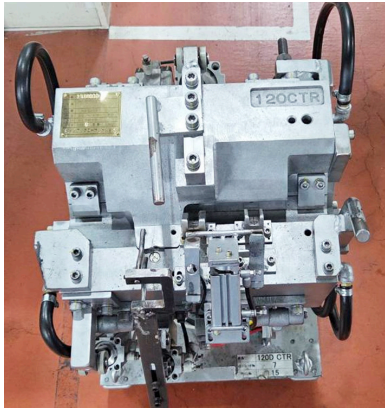


トヨタ、仕入れ先との連携で補修部品用金型を削減 管理工数減らして適正取引へ

自動車メーカー、自動車部品・素材・サプライヤー

2026年4月21日 05:00



イノアックが所有する金型は10万個弱ある（イノアックコーポレーション提供）



類似色を統合し部品種類を削減する

トヨタ自動車は仕入れ先と協力し、補修部品用の金型を減らす取り組みを進めている。ウレタンや樹脂などの内外装部品を手掛けるイノアックコーポレーション（野村泰社長、名古屋市中村区）では、トヨタと連携して補修部品で似た形状や色味を統合することで種類を削減している。また、品番と金型をひも付け、検索できるシステムを構築することで確実な型廃棄につなげている。近年、製造業では金型の無償・長期保管問題が頻発しており、金型の適正管理と廃棄促進に向けた改革が欠かせない。特に完成車メーカーを頂点とした重層的なピラミッド構造を持つ自動車産業においては金型の扱いは複雑化するが、トヨタは補修用の金型そのものを削減することで管理工数を減らす考えだ。

車両生産終了後の補修用部品の供給について、トヨタが種類削減の議論を始めたのは2020年頃からだという。まずは部

品個別の色について、仕入れ先とデザインや補給部品を扱うトヨタ社内の部署と連携し、類似色については統合することで全体最適化した。色統合はユーザーの可視性に応じて優先度をつけた。

イノアックでは色統合基準を積極的に採り入れることで品数削減に取り組み、色統合提案も多数実施してきた。一部の部品では色数を半減することに成功したという。色数を減らすことは直接的に金型を減らすことにはならないが、トヨタから補給部品の供給打ち切り連絡を受けた際、色数が少ないほど金型廃棄の判断がしやすくなる。

色と同様に、形状についても最適化できる部品の検討を進めている。車両生産工場での組み付けを前提とした仕様も見直し、品番削減につなげている。また、高級ブランド「レクサス」のモデルについては専用色が多く、部品出荷数も少ないためにリアスポイラーなどを素地状態で出荷する取り組みも始めている。

金型の確実な廃棄に向けては、品番から金型をひも付けするだけでなく同金型で生産する全品番を特定するシステムを構築した。ティア2（2次部品メーカー）以降にも情報を共有化し、サプライチェーン（供給網）全体で金型廃棄を進めていく。

受動的な供給部品打ち切りでなくトヨタと連携した能動的な改善活動により、イノアックでは金型廃棄の年間目標1000個に対し25年は2000個を廃棄した。同社が保有する金型はピーク時に約12万個に達したが、現在は10万個を切る。補給用設備の撤去で工場スペースに空きができ、新製品の投入が可能になったという。

トヨタの場合、金型はすべて仕入れ先の資産であり、トヨタ側で金型の管理や廃棄判断はできない。特に他メーカーへの納入分や共有関係がある場合、トヨタ側が金型を追跡することができないという。こうした金型管理の複雑さが廃棄判断を遅らせる要因となる。金型管理ができていないと必要な保管費の算出もできず、取引適正化を阻害する要因となり得る。トヨタは仕入れ先との連携を強化することで金型廃棄を後押しし、適正取引につなげていく。